

福岡市都市景観賞20周年記念座談会

私が思う 福岡市の都市景観 歴史、現在そして未来

佐藤 優氏（九州大学教授）
長谷川 法世氏（漫画家）
松岡恭子氏（建築家）
村仲皆美氏（タレント）



C O N T E N T S

3 福岡市都市景観賞20周年記念座談会 私が思う福岡市の都市景観～歴史、現在そして未来～

佐藤 優氏（九州大学教授）

長谷川法世氏（漫画家）

松岡恭子氏（建築家）

村仲皆美氏（タレント）

8 特集 20年前も。これからも。心を動かす景観があるまち。

1986年～1990年 新しい時代の息吹きが、ひとを元気に、まちを華やかに。

1991年～1995年 ウォーターフロントを中心に、まちは潤い、美しく。

1996年～2000年 ひとが、文化が集い交流するまち。新世紀へ、そしてアジアの拠点へ。

2001年～2005年 心を豊かにする景観。そこにあるのは、やさしさと福岡らしさ。

18 第20回 福岡市都市景観賞受賞作品

茶山の家 城南区茶山2丁目19番10号

濱地酒造(株) 西区元岡1442番地

(株)マイヅル みそ蔵・店舗 西区姪の浜3丁目3番27号

天神ルーチェ 中央区天神2丁目3番24号

西南学院大学法科大学院、大学院、西南クロスプラザ 早良区西新3丁目194番1号

日本基督教団 福岡警固教会 中央区警固2丁目11番20号

福岡市立西陵公民館・老人いこいの家 西区上山門3丁目5番1号

23 第10回 福岡市景観エッセー

元気を出そう油山 倉掛聖子(福岡市南区)

福岡の景観 ～遊び場の記憶～ 大坪空也(福岡市早良区)

窓から見える景色 石橋亜弓(福岡市西区)

ツバメが来る風景 佐野さおり(福岡市中央区)

26 これまでの都市景観賞受賞作品

新しいものと歴史あるもの、 そのバランスを保ちながら発展していけるよう 市民みんなで考えていかなくては…(長谷川)

佐藤 福岡市に都市景観条例と都市景観賞が誕生して今年で20年を迎えました。皆さんは、この間の福岡の景観について、どのような印象や感想をお持ちですか？

村仲 私は福岡に住み始めて20年くらいになります。年月の流れってファッションなどを通して人で感じる人が多いんですが、こうして20年の受賞作品を見ると、建物や**景観で時代を感じる**こともおもしろいですね。福岡のまちの様子はものすごく変化したなと思います。

佐藤 景観賞の審査は結構大変なんです。300件ほどの応募写真をまず選定。そこから20数件に絞って、審査委員みんなで現地を一つずつ見て回ります。丸1日要します。確かに村仲さんがおっしゃるように、応募作品に時代の傾向が顕著に現れていると、毎年感じます。

松岡 日本各地に景観賞がありますが、福岡市の表彰で特徴的だと思うのは、対象が建築物に限らないということです。

活動やモニュメントなど幅広い。
中でも印象的だったのは2000年に表彰された「100円バス」。バスを利用しやすくすることが、普段とは違う高さの目線で都市を眺める機会を増やすことに繋がった、という主旨の評価内容だったと記憶しています。視線を変えるといつもの風景が違って見えるし、新しい発見があつて楽しいで

佐藤 御供所地区ですね。今回も景観賞20周年を記念して、お寺をライトアップしたり、お寺のご協力でジャズコンサートの会場になったりするんですよ。

長谷川 博多にあるお寺の多くは禪宗なんです。修行の道場であるという性格上、原則として普段は関係者以外にはあまり開放していない。それだけに、ライトアップなど、市民の皆さんが歴史的な建物に目を向けてくれる機会を提供してもらうのはいいことです。

佐藤 景観を通して**福岡の歴史を楽しむ**ことができる、そんな視点や意識を一層高める役割を、景観賞が担っていった

すよね。福岡市の景観賞に対する姿勢や思いを象徴しているなと思いました。

佐藤 市民に、より豊かで**新しい景観への視点**を提供したい、という姿勢とでもいうのでしょうか。ともかく、市民にとって、福岡という都市にとって良い賞にしようと関係者も模索を重ねてきた20年でした。

村仲 取材で市内を歩いている時などに、普段はつい見過ごがちだけど、実は身近な場所に表彰された景観がこんなにあるんだということにあらためて気付くことがあります。また、寺町通りなど、福岡には歴史を感じるすてきな街並みもありますよね。

らしいですね。

長谷川 博多は2000年の歴史を重ねてきたまち。一方、福岡というまちはフロンティア。城が出来てから400年、新しいまちを構築し続けてきた。ただ、次の世代に文化や伝統を伝えていくことを考えると、今後ますます、新しいものと歴史、そのバランスを保ちながら発展していけるよう、みんな考えていかなくてはならないのかもしれないよ。

佐藤 この20年で福岡という都市は大きな変化を遂げました。その変化は1989年に開催されたアジア太平洋博覧会を境に加速していったように思いませんか？

松岡 それまでは、市民の間で都市景観の一部として**「海」を意識する視点**が少なかったように思います。アジア太平洋博覧会にともなうもち地区の整備などをきっかけに、福岡の都市景観を語る上で「海」が重要なキーワードになってきましたね。

村仲 私は、福岡タワーから見る景観と、能古島から見る景観が大好き。海を囲むように広がる福岡市の景観はすばらしいと思います。

佐藤 村仲さんは取材をしていて、福岡のまちについて皆さんの意見を聞く機会も多いのではないですか？

村仲 実際によく耳にするのは、福岡に住

景観を通して生活を楽しむことができる、
そんな市民の視点によって都市の魅力を育てる役割を、
景観賞が担っていただけたらいいですね。(佐藤)



長谷川法世 Housi Hasegawa
福岡市出身。漫画家、小説家、エッセイスト。現在、「博多町家ふるさと館」館長を務める。代表作品は、漫画「博多っ子純情」、小説「走らんか!」、エッセイ「博多レッスン」など多数。



佐藤 優 Masaru Sato
九州大学大学院芸術工学研究院教授。福岡市都市景観賞審査委員長。アジア景観デザイン学会会長。芸術工学会会長。日本サインデザイン協会常任理事。主な活動：福岡市西中島橋デザイン、福岡市地下鉄七隈線トータルデザインなど多数。主な著書に「コミュニティデザイン」、「パブリックデザイン辞典」、「患者にやさしい病院をめざして」など

新しいものと伝統、自由と規律、 景観づくりにもそのバランス感覚とルールづくりが 求められていると思います。(松岡)

んでいる人も、来福している人も「福岡って、いいよね」という声ですね。

松岡 どんところが「いいよね」なんですか？

村仲 「都会だけど自然も豊かだから」という意見が多いように思います。先ほどの海が都市景観の一部になっているというお話しにも通じることかもしれません。

松岡 村仲さんのお話しからもわかるように、福岡のまちのおもしろさは、**一元的な価値では測りきれない**ところだと思えます。多様な表情があって、それがひしめきあっていて。だからといって「何でもあり」になってはいけない。先ほど長谷川さんも問題提起されたように、新しいものと伝統、自由と規律、景観づくりにもそのバランス感覚とルールづくりが求められていると思います。

松岡 以前の福岡には「住宅街」「歓楽街」という区切りがあいまいというか、商・住が共存しているようなエリアがけっこうありましたが、この20年ですいぶん減ったように思います。でも多様なものの共存が失われると、都市は窮屈で面白くなっていきます。

村仲 それは私も違う意味で感じます。まちが年齢分化しているような気がして。若者しかいないまちの景色ってなんだか寂しい。いろいろな年代が共存しているまちが減ってきて

すね。

村仲 昔に比べるとイルミネーションや草花などで飾る家が多くなっているような気がします。

松岡 官の空間、民の空間ではなく、市民一人ひとりが公の空間とそこへの参加を意識していくことが重要ですね。

長谷川 都市づくり、景観づくりにはみんなで参加していききたいですね。ところで、皆さんはどうして山笠をかつぐことを「山をかく」というかご存じですか？

村仲 私もずいぶん前、取材中に「山をかつぐ」といって、「ちがうっ！」と叱られたこと



松岡恭子 *Kyoko Matsuoka*
建築家。スピンガラス・アーキテクトズ代表取締役。九州大学卒業後、東京都立大学大学院、コロンビア大学大学院修了。建築の設計を中心に、橋や道路などのデザインも手がける。

ましたね。

長谷川 中洲も今はすっかり大人だけの街ですが、以前は昼や休日は映画を観たり、商店街、百貨店で買い物を楽しむ家族の街、夜は歓楽街という具合に、2つの顔が共存していました。

村仲 都市にもメリハリって必要なんですよ。

佐藤 共存の意識が希薄になってきたということは、公共空間と私的空間の間においても大いに感じます。その一方で、市民が自発的に公共空間の保全に力を注いでいる場合もある。これからますます、そういう活動は大いに評価されたり、注目されるべきで

があります。どうしてなんですか？

長谷川 「かつぐ」も「かく」も「肩に物を載せ運ぶこと」なんです。ただし「かく」は2人以上で。わかりやすい例が「駕籠^{かじ}かき」。つまり山笠は独りの力ではできないし、みんなの力が調和して初めて成功する祭なんです。**全員** なるほど。

村仲 これで長年のナゾが一つ解けました。

長谷川 景観だって、「建物」「自然」「人」「歴史」など、各々が独立したものでなく、それぞれの兼ね合い、周囲との調和がとれていないと、長いこと親しまれ、守り継がれるものにはなれない。

佐藤 福岡市の景観賞20周年を語り合うに相応しいお話が聞けました。私的空間も公共空間も、新しいものも伝統的なものも、福岡という都市を構成するあらゆる景観をみんなで大切にしたり、みんなに参加して創っていったり、そんな**意識や活動が生まれるきっかけ**のひとつに、この都市景観賞があると思います。

松岡 そういう意味でも、選定が市民の推薦から始まる**「市民の目を重視した賞」**という特徴が生きてくる時代になりました。これからは単体のものだけではなく、協働の仕組みやルールづくりも対象になってくると福岡ならではの都市景観をつくる基盤の一つになりますね。



村仲皆美 *Tomomi Muranaka*
熊本県人吉市出身。キャスター兼レポーターとしてテレビ番組を中心に活躍中。グルメレポーターとして、福岡市内を知り尽くす。最近、グルメ本「ともぐい」を出版。

まちが年齢分化しているような気がして。
若者しかいないまちの景色ってなんだか寂しい。(村仲)